『稲むらの火』における「防災」の思想について

On the Philosophy of the Disaster Prevention in *Inamura no Hi*

笠井　哲
福島工業高等専門学校一般教科
Akira Kasai
Fukushima National College of Technology, Department of General Education
（2012年9月11日受理）

When the large tsunami hit Hiro Village in 1854, Hamaguchi Goryo saved many lives by burning the village's precious rice sheaves. Lafcadio Hearn was inspired by this tale, and used it to write a short story called *A living God*. Nakai Tsunezo wrote a Japanese story based on Hearn's story. The story was entitled *Inamura no Hi* (The Rice Sheaf Fire). He also used his own money to help his village recover from damage caused by the tsunami and build an embankment. The purpose of this paper is to consider the philosophy of the disaster prevention in *Inamura no Hi*.
Key words: tsunami, Hamaguchi Goryo, *Inamura no Hi*, embankment, disaster prevention

1. はじめに

2011年３月11日に、「東日本大震災」の地震により引き起こされた大津波が、東北地方を襲った。津波という言葉が、tsunami と書いて国際的に通用するほど、日本列島の沿岸は、昔からしばしば大津波による災害を被ってきた。

津波は、ひとたび襲来すれば大量の死を招く現象である。それは、過去の事例からも明らかである。それだけに、津波の防災対策としては、防潮堤や防潮林、水門などのハードな施設の整備を進めて行く一方で、的確な情報の伝達や迅速な避難など、ソフト対策が重要になってくる。

ある地域が大きな津波災害に襲われるのは、何十年、場合によっては、何百年に一度のことであろう。したがって津波防災は、頻度の低い自然現象でありながら、発生すれば、壊滅的な事態を招く津波という現象に対して、如何に対応すればよいかが問われる。

2011年６月には、国会で「津波対策推進法」が成立し、11月５日を「津波防災の日」と定めた。なぜ、この日かといえば、1854年の「安政南海地震」が発生した12月24日が、旧暦の11月５日に当たっていたからである。「稲むらの火」の故事にちなみ、その日を「津波防災の日」として、津波に強いまちづくりや人々の津波防災への意識を高める日に当てたのである。

安政南海地震では、房総から九州までの広い範囲で津波が観測された。この津波の波の高さは、最高で30メートルを超えるものであった。物語『稲むらの火』は、この津波に襲われた、紀州和歌山広村（現在の和歌山県有田郡広川町）を舞台に、浜口五兵衛の活躍が描かれている。津波が事実であったように、五兵衛も実在の人物である。本稿の目的は、『稲むらの火』における「防災」の思想について考察することである。

2. 安政の大津波

和歌山県は、西側が紀伊水道と太平洋に面している。海岸線は、総延長623kmにも及ぶ奇岩怪石が点在するリアス式で、風光明媚な観光地として、１年を通じて全国から多くの人々が訪れている。

しかし、近海は浅海で、また「南海トラフ」が走っていることから、古くから地震や津波の被害を数多く受けてきている。

広川町において、津波被害は有史上８回を数え、特に、宝永４年（1707）の地震津波と安政元年（1854）の南海道沖地震津波（「安政の大津波」）では、壊滅的な打撃を受けた。死者36人、家屋の流出は125棟、全・半壊家屋56棟もの被害を出した、安政の大津波については、当時の様子が、浜口五兵衛のモデル・濱口梧陵の手記に、次のように記されている。

地震に驚いて、家を出て道路に立とうとするけれど、立つこともできず、転んでしまうばかりです。家の瓦は落ちて飛び交い、壁は崩れ、塀は倒れ、これらのために、塵が空を覆い、隠さんばかりに舞っています[1)]。

安政元年（1854）11月４日（新暦12月23日）午前10時頃、遠州灘を震源として激しい地震が起こった。これは、「安政の東海地震」と呼ばれているものである。大地震の後は、津波が襲ってくると、伝え聞いていた梧陵は、直に村民に家財道具を高台へ運ばせ、女性、子ども、老人を八幡神社に避難させた。

そして、盗難や火災予防のため、村民たちを30人ばかり３班に分け、村の警戒に当たらせ、避難者には粥を作って与えた。この日は、小舟を破損した程度で、幸い惨事には至らなかった。

翌５日には、村人たちは家路につき始め、その多くが前夜の礼を言いに梧陵の家を訪れた。元の平穏な漁村に戻るかと思われたその矢先の午前４時頃、再び強い地震が発生した。前日のものとは比べようのない激しさで、瓦が飛び壁は崩れ、塀が倒れるほどであった。

地震の強さは、マグニチュード8.4と推定されている。西南の空には黒雲がたちこめ、その間からは金の光が差し込み、海上では巨砲を連発するような轟音が数回鳴り響いたと伝えられている。これが「安政の南海地震」である。そして、地震発生から十数分の内に、巨大津波が村を襲う。広村では前後７波が確認されているが、第二波が最も高く、その高さは８mにも達したといわれている。

津波は、停泊中の漁船をなぎ倒し、広川を鋭く逆流しながら陸地へと突き進んだ。走って逃げながら津波に押し流される者、流れる材木にしがみついたまま波に呑み込まれる者、巨大な黒壁と化した津波は、瞬時にして村を地獄絵図に変えてしまった。梧陵自身も、津波に押し流されたものの、幸いにして高台に漂着し、一命を取り留めている。

村人を案じた彼は、すぐさま避難所となっていた八幡神社に駆けつけ、悲鳴や泣き声の中を、「落ち着きなさい」となだめてまわった。そして、彼は10人あまりの男たちに松明を持たせて、被害状況を調べに村の中へと向かった。

日もすっかり暮れ、さらに道にも流失家屋が折り重なり、歩くこともままならない。梧陵たちは、やむをえず途中で引き返すことにしたが、逃げ遅れ、まだ海に漂流している者がいるかもしれないと考え、安全な場所を知らせるために、道端の「稲むら」に火をつけたのである。

以上が、実話の『稲むらの火』である。

後述する物語のように、五兵衛の放った稲むらの火により村人全員の生命が救われたのではないが、この灯かりにより救われた者は、９人もいた。

被災直後という極限下でも、漂流者に安全な場所を知らせるために、稲むらに火を放った梧陵の冷静な判断力と機転は、驚かされる[2)]。

では、この逸話はどのような経緯で脚色され、教材として用いられるようになったのであろうか。

『稲むらの火』には、モデルになった短編小説がある。『怪談』で有名なラフカディオ・ハーン（小泉八雲、1850～1904）の『生き神様』というものである。明治23年（1890）に来日したハーンは、松江、熊本などで教職に就き、その後、神戸でクロニクル紙の論説記者となった。

彼は、広村で起きた濱口梧陵の美談を耳にし、『稲むらの火』の原型にとなる A Living God 、すなわち『生き神様』を執筆したのである。これは、明治30年（1897）の『仏陀の畑の落穂拾い』の冒頭に収録されている。

また、『生き神様』では、津波の大きさに比べ、地震の揺れが小さかったこと、津波襲来の前に海水が引き潮になっていることなど、安政の大津波とは異なる描写が随所に見受けられる。

これは、ハーンが執筆の前年に、岩手県田老村など東北地方の一部で、２万２千人もの死者を出した「三陸地震津波」について妻から聞き、ヒントを得たからであると思われる。

それから約40年後の昭和初期、この『生き神様』を中井常蔵（1907～1994）という青年教師が、教材用に書き下ろしたのが『稲むらの火』である。湯浅町出身の彼は、梧陵が創立した耐久中学校に入学し、梧陵の築いた大堤防を通学路に利用していたという。

師範学校在学中に、英語の教材として『生き神様』と出会い、たいへん感銘を受けた彼は、教師となってから、いつか梧陵の思いを子どもたちに伝えたい、と思っていた。

そして、昭和９年（1934）に、文部省が第４期国定教科書の国語の教材を全国に募集していたので、中井は、『稲むらの火』を文部省へ応募した。これが当選し、昭和12年（1937）から、尋常小学校第５学年用国語読本に載ることになった。

3. 稲むらの火

では、物語『稲むらの火』とは、如何なるものであるか。ある海辺の村の高台に住んでいる庄屋の老人・五兵衛が、気味の悪い地震の揺れを感じた後、海水が沖へ向かって引いて行くのを見て、津波の襲来を予感する。そこで、彼は自宅の田んぼに積んであった「稲むら」（刈り取ったばかりの稲の束）に、松明で火をつけ、庄屋の家が火事だと思わせ、村人全員を高台に集め、津波から命を救ったという物語である。

『稲むらの火』全文は、次のようである。

「これは、たゞ事ではない。」

とつぶやきながら、五兵衛は家から出て来た。今の地震は、別に烈しいという程のものではなかった。しかし、長いゆったりとしたゆれ方と、うなるような地鳴りとは、老いた五兵衛に、今まで経験したことのない無気味なものであった。

五兵衛は、自分の家の庭から、心配げに下の村を見下ろした。村では、豊年を祝うよい祭の支度に心を取られて、さっきの地震には一向気がつかないもののようである。

村から海へ移した五兵衛の目は、たちまちそこにすいつけられてしまった。風と反対に波が沖へ沖へ動いて、見る見る海岸に広い砂原や黒い岩底が現れて来た。

「大変だ。津波がやって来るに違いない。」

と、五兵衛は思った。このままにしておいたら、四百の命が、村もろ共一のみにやられてしまう。もう一刻も猶予は出来ない。

「よし。」

と叫んで、家にかけ込んだ五兵衛は、大きな松明を持って飛び出して来た。そこには、取り入れるばかりになっているたくさんの稲束が積んである。

「もったいないが、これで村中の命が救えるのだ。」

と、五兵衛は、いきなりその稲むらの一つに火を移した。風にあおられて、火の手がぱっと上がった。一つ又一つ、五兵衛は夢中で走った。こうして、自分の他のすべての稲むらに火をつけてしまうと、松明を捨てた。まるで失神したように、彼はそこに突っ立ったまま、沖の方を眺めていた。日はすでに没して、あたりがだんだん薄暗くなって来た。稲むらの火は天をこがした。山寺では、この火を見て早鐘をつき出した。

「火事だ。庄屋さんの家だ。」

と、村の若い者は、急いで山手へかけ出した。続いて、老人も、女も、子供も、若者の後を追うようにかけ出した。

高台から見下ろしている五兵衛の目には、それが蟻の歩みのようにもどかしく思われた。やっと二十人程の若者が、かけ上がって来た。彼等は、すぐ火を消しにかかろうとする。五兵衛は大声に言った。

「うっちゃっておけ。一大変だ。村中の人に来てもらうんだ。」

村中の人は、道々集まって来た。五兵衛は、後から後から上がってきたる老幼男女を一人一人数えた。集まって来た人々は、もえている稲むらと五兵衛の顔とを代わる代わる見くらべた。

その時、五兵衛は力一ぱいの声で叫んだ。

「見ろ。やって来たぞ。」

たそがれの薄明かりをすかして、五兵衛の指さす方を一同は見た。遠くの海の端に、細い、暗い、一筋の線が見えた。その線は見る見る太くなった。広くなった。非常な速さで押し寄せて来た。

「津波だ。」

と、だれかが叫んだ。海水が絶壁のように目の前に迫ったと思うと、山がのしかゝって来たような重さと、百雷の一時に落ちたようなとどろきとを以て、陸にぶつかった。人々は、我を忘れて後へ飛びのいた。雲のように山手へ突進して来た水煙の外は、一時何物も見えなかった。人々は、自分等の村の上を荒れ狂って通る白い恐ろしい海を見た。二度三度村の上を海は進み又退いた。

高台では、しばらく何の話し声もなかった。一堂は、波にえぐり取られてあとかたもなくなった村をたゞあきれて見下ろしていた。

稲むらの火は、風にあおられて又もえ上がり、夕やみに包まれたあたりを明るくした。始めて我にかえった村人は、この火によって救われたのだと気がつくと、無言のまゝ五兵衛の前にひざまずいてしまった[3]。

以上の物語と実話との相異について、検討しておきたい。『稲むらの火』の地震は、「今の地震は、別に烈しいという程のものではなかった。」というように弱いゆれであった。ハーンの執筆の契機となった、明治三陸沖地震では、三陸沿岸でも、震度が２から３程度の弱いゆれに過ぎなかったので、誰も津波を予想し

ていなかったところに、大津波が襲い大被害となってしまった点が共通している。

『稲むらの火』で印象的な描写は、津波に先立つ急激な引き潮の情景である。異常な引き潮は津波の前ぶれなので、すぐに避難せよという知識は正しく、スマトラ沖地震でも、古くからそのような言い伝えを守って、現地住民が迅速に避難したため、ほとんど死者を出さなかったと報じられている。しかし、その一方で、「津波の前には、必ず潮が引く」とは限らないことも覚えておかなければいけない。すなわち、

> 津波から身を守るためには、沿岸にいて地震を感じたら、まず避難する心構えが必要だ[3]。

といえる。

梧陵が稲むらに火をつけたのは、『稲むらの火』と実話に共通の出来事であるが、その意味は大きく違う。実話では、津波の第一波が引いた後、暗闇に取り残された人たちに、逃げ道を示すために燃やしたものであった。梧陵は、逃げ遅れてまだ海に漂っている者がいるかもしれないと考え、安全な場所を知らせるために、道端の稲むらに火をつけたのである。森田武は、

> 被災直後という極限下の中でも、漂流者に安全な場所を知らせるために稲むらに火を放った梧陵の冷静な判断力と機転の速さには、ただただ驚かされるばかりである[4]。

といっている。

また清水勲は、『稲むらの火』から学ぶべき観点として、次の４点をあげている[5]。

第一に、文学的な価値の高さ。

第二に、老人と若者の役割分担。災害が起きたとき、人生の達人としての老人（指導者）は、その経験を生かし若者に指示を与え、また若者は身軽な活動できる能力を発揮することに大切さ。

第三に、状況判断と対処の仕方。高台から見ていた五兵衛は、津波がやってくるという危機感を抱き、瞬時における状況判断と対応をした。指導者としての危機管理のあり方。

第四に、村人の生命を守ること。高台に上がってくる村人を一人一人数え、確認している細心の注意。

以上のように、『稲むらの火』からは、具体的な「防災教育」上の観点がある。

4. 主人公のモデル・濱口梧陵

『稲むらの火』は、昭和12年（1937）から昭和21年（1946）にかけて、尋常小学校第５学年用国語読本、初等科国語六に、教材として用いられたものである。その舞台となったのは、安政の大津波に襲われた広村（現広川町）である。そして、前述のように、物語の主人公・五兵衛は、被災した村人の救済に奔走し、村の復興に尽力した濱口梧陵（七代目濱口儀兵衛、1820～1885）をモデルにしている。

濱口梧陵は、文政３年（1820）、紀伊国有田郡広村の豪族・濱口家の分家、三代目七右衛門の長男として生まれた。濱口家は、元禄年間に醤油醸造業を始め、「ヤマサ醤油」を興し、江戸深川にも出店していた。享保、宝暦の頃には、江戸第一の醸造業としてその名を馳せていた。

天保２年（1831）に、本家六代目儀兵衛に跡継ぎがいないことから、梧陵が嫡子として本家に入り、家業を見習うために銚子へと赴いた。濱口家では、家訓として、たとえ後継者であろうとも、

> 少年時代は安逸な生活が許されず、困苦に耐えることのできる精神を養い、人を率いる方法を会得するために、丁稚や小僧と寝食を共にすることを慣例としていたから、梧陵もその慣例に従って精励刻苦しました[6]。

と、厳しいしつけのもとで育てられた。

20歳で湯浅の池永右馬太郎の娘と結婚し、再び銚子に戻った梧陵は、そこで終生の師・三宅良斎（1817～1868）と出会う。良斎は、銚子で開業していた蘭医で、梧陵は彼から西洋事情を教えられた。尊皇攘夷が強く主張されていた時代でもあり、梧陵は、国防問題に目を向けていくようになった。

自らも修練を積もうと考えた梧陵は、当時の兵学と砲術の第一人者であった佐久間象山（1811～1864）の門をたたいた。後に梧陵が、広村に持ち帰ったゲベル銃は、彼から購入したものである。また、勝海舟（1823～1899）と交友を持ったのも、この頃だとされている。梧陵は、海舟の先見性と人格に強く惹きつけられ、当時無名で貧しかった海舟を経済的に援助したという。八幡神社に建立された、梧陵の偉業を称えた記念碑の題字と撰文は、勝海舟によるものであり、二人の親交が深かったことを物語っている。

嘉永４年（1851）に、久しぶりに帰郷した梧陵は、早速村の男たちを集めて、国防の必要性を説き、８月に広村崇義団を結成した。そして、諸外国に対抗するために、青年の教育こそが大切であるという考えから、翌年には、田町の納屋に稽古場を開いた。

剣道は田辺の沢直記が、槍術は梧陵自身が、さらに

子弟の知育を開発するため、国学・漢学に精通していた広八幡神社神主・佐々木久馬之助が指導に当たった。この文武両道の私塾は、幾多の変遷を経て、現在の耐久中学校・耐久高等学校へと引き継がれている。

嘉永６年（1853）に、家督を相続した梧陵は、濱口家の家主の号である「儀兵衛」と改名した。また、再び家業のため上京するが、時を同じくし浦賀にペリー（1794～1858）提督の率いる米国艦隊が入港し、開国を迫ってきた。

アメリカの日本に対する姿勢は、威圧的であったが、梧陵は、冷静に時勢を見極め、「日米両国の交易は、双方に利益をもたらすのではないか」とアメリカの要求に理解を示していた。この頃から、梧陵は、開国論を説くようになり、「外国から交際を求めてきているのに、その真意を見極めずに拒絶するのは、遠来の客に対し、用事も聞かずに追い返すのと同じである」と批判し、鎖国攘位論を物陰から吠える犬に例える。

この件から、彼は海外への関心を高め、欧米視察を強く希望し始めた。しかし、当時は幕府がこれを認めるはずもなく、やむなく帰郷し、人材育成事業専念することにした。そして、翌年「安政の大津波」の襲来を受けたのである。

5. 広村防波堤の建設

ハーンと中井による『稲むらの火』物語は、地震当日の梧陵の行動に焦点を当てているが、津波被害の復興こそ、さらに重要な課題であった。

梧陵は、稲むらに火を放ったその足で、すぐさま隣村の法蔵寺へ行き、貯蔵米十数石を借り入れ、にぎり飯を作り、避難している村人たちに配った。さらに、今後の避難生活を考え、深夜、中野村（現在の広川町上中野）の庄屋に懇願し、年貢米50石を借り受けた。

被災後２、３日経つと、八幡神社や法蔵寺に避難していた村人1400人に、寒さと飢えを訴える者が出始め、引き続く余震と「再び大津波が襲ってくる」という噂で、精神的にも疲弊している様子がうかがえるようになった。梧陵は、そうした村人たちを慰める一方で、炊事の指導や、藩の役人との救済対策の話し合いなどに奔走した。

そして、余震も治まった11月８日に、ようやく村人たちは各自家に戻り、後片付けを始めるようになる。村が復興への第一歩を踏み出したのである。しかし、被害を受けていない家はほとんどなく、家財道具が流失し、柱が傾き、壁が落ちていては、どこが自分の家か、見分けがつくはずもない。

この惨状にショックを受けた漁民の中には、離村をいい出すものも現れ、また、流失品をめぐり不正や争いが絶えなかったという。梧陵は、村人からの苦情や相談を受けるため、仮役場を設け、人夫の配置を指揮した。

また、借り受けた僅かな米だけでは、どうにも村人たちの空腹を満たすことはできないことから、梧陵自ら、先例となるように玄米200俵を寄付した。その他にも、梧陵は、漁船や農具を村人に買い与えたり、家屋修復の際の援助金を出したりなど、村人救済のために多額の私費を投じている。

当時、村人の間では、「広村では50年から100年ごとに津波が襲来する」と信じられていた。そんな中、安政の大津波に襲われ、村民たちの間でも、いよいよ「ここでは安全に暮らしていけない」という雰囲気が流れ始めていた。

また、梧陵は、生活必需品を与えるなど、被災した村人への援助が、逆に彼らの自立心を削いでしまうのではないかと考えるようになっていた。こうしたことから、実に被災後３ヶ月という異例のスピードで、防波堤の建設工事が始められたのである。

さらに、広村の年貢は全国平均よりも重く、村人たちの日々の生活を圧迫していたため、防波堤を建設することで、特に年貢の重い上田を堤防の下に埋めてしまおうという考えもあった。

工事は、公共的性格が強いにもかかわらず、梧陵の私費で賄われている。公共事業として国の支出に頼っていたら実現しないかも知れない、という梧陵の判断からであろう。

工事には職を失った村人400～500名が毎日従事し、その中には女性や幼い子どもも含まれていた。少しでも働ける者には仕事は与え、収入を得させようとしたのである。支払いはその日その日のうちに日当で支払われたために、村人から大変喜ばれたという。また、農民に配慮し、農閑期に工事が進められたことから、農民たちは、年間を通じて安定した収入を得ることができるようになった。この結果、村人の離散を最小限に食い止めることができたのである。

安政５年（1858）12月に、濱口家の家業の都合と国策であった鎖国政策の是非をめぐり、国内の緊張が強まり、梧陵が上京を余儀なくされたことから、当初の計画の３分の２の段階をもって工事は中止された。総従事者は、延べ５万6736人を数えた。

こうして、全長650m、高さ５m、根幅17m、天幅３mの一大防波堤が完成した。堤防強化のために、外側２列に松が、土手にハゼの木が植樹された。なお、その松の木には、樹齢20～30年のものが選ばれ、自然に生えていた方向をメモし、そのままの状態で山から植え替えられたため、一本も枯れなかったというエピソードが残っている。

この防波堤のおかげで、昭和21年（1946）の「昭和の南海地震」で４mの津波に襲われた際にも、町内では民家の一部が浸水した程度で事なきを得た。しかし、堤防外での被害は大きく、22名の死者を出してしまった。現在では、海側の斜面がコンクリートで固められ、30本ほどの松がその当時の面影を残している。

私財を投げ打ち、寝食を忘れて村人の救済や地域の復興に身を投じた梧陵への村人の思いは厚く、それは神への信仰に近いものであった。そこで彼を「濱口大明神」として祭り、代々その徳を伝えようと神社建設の話が持ち上がったが、耳にした梧陵が、この計画に断固反対したので実現しなかった。しかし、梧陵への恩義を忘れられない村人たちは、彼を「大明神様」と呼ぶようになったという。

6. おわりに―『稲むらの火』の意義―

伊藤和明は、『稲むらの火』を、「防災教育」の名作と位置づけ、次のように評している。

> 振り返ってみると、「稲むらの火」は、防災教育の不朽の名作だったといえましょう。そこには、一年の収穫である稲むらを燃やしてまで、村人を救った五兵衛の物語を通して、人の命の大切さ、尊さを教える防災の基本的な理念が盛りこまれています。また、海水の異常な動きから、津波の襲来を予見した、五兵衛の自然認識の確かさを通して、先人からの伝承がいかに大切なものであるかを教えていると思います。
>
> さらに五兵衛の行動は、危険を予知したとき、すみやかにその回避につとめるリーダーとしての行動であって、現代に通じる危機管理のモデルということができましょう。
>
> 災害が多発する日本で、防災の理念を正面から声高に叫ぶよりも、『稲むらの火』のような物語を通して、人の心を打つ教育、情緒や情感に訴えかける教育のほうが、ずっと勝っているように思えてならないのです[7]。

また、河田恵昭は濱口梧陵の行動について、

> 津波から村や住民を守るということは、いわゆる防災だけではなくて、津波によって被害を受けた住民の、生活支援を抱き合わせてやったということです。つまり防災と事業をカップルで進めたというところに、非常に大きな意味があると思います[8]。

と高く評価している。また、津波防災思想の普及に努めてきた山下文男は、ポスト3.11を予期していたかのように、かつて次のように述べた。

> 国や自治体は、この際、防災行政の軸足と力点を、しっかりと住民の防災教育に据えて、津波に限らず、自然災害についての防災教育を義務化することをはじめ、結局、これが津波防災の決め手をなす最重要課題と位置づけて、防災教育と防災意識の高揚のためのきめ細かな施策を、推進すべきである[9]。

このようにするためには、梧陵の次の言葉が参考になる。「防災」思想の要が、ここにある。

> 「万が一の時になって、思いをめぐらすのではなく、常日頃から非常の事態に備え、一生懸命にわが身を生かす心構えを養うべきである。住民百世の安堵をはかれ」（「濱口梧陵伝」より）[10]

以上により、『稲むらの火』の「防災」思想と復興への取組みは、現代的意義を有しているといえる。

文　献

1）江戸時代 人づくり風土記 30 ふるさとの人と知恵 和歌山，p. 84（農山漁村文化協会，1995）

2）戸石四郎：津波とたたかった人―浜口梧陵伝，p. 76（新日本出版社，2005）

3）伊藤和明：津波防災を考える 「稲むらの火」が語るもの，pp. 6－8（岩波書店，2011）

4）森田武：東日本大震災から学ぶ 「津波にも負けず」，p. 237（近代消防社，2011）

5）清水勲：防災教育と「稲むらの火」，pp. 215～221参照，歴史地震 第12号（歴史地震研究会，1996）

6）前掲，江戸時代 人づくり風土記 30，p. 328

7）伊藤和明：日本の津波災害，pp. 174－175（岩波書店、2011）

8）NHK取材班編：その時歴史が動いた 34，p. 56（KTC中央出版，2005）

9）山下文男：津波てんでんこ，pp. 218－219（新日本出版社，2008）

10）前掲，その時歴史が動いた 34，p. 61